

可觀小説卷卅八

一、葛巻昌興が元祿三年下國の記

元祿三年庚午御歸國の御供し、五月二十二日御發興の頃、此野の名残も忘れがたくて。

故郷もおなじ雲井と思へども馴來しものを武藏野のつきわけすぐる袖の雫に武藏野の草葉の露や置きまさららん朝ぼらけ在明の月を袖に見て露わけ侘るむさしのゝはら戸田川のあたりなる野に、草刈の童の大なる籠に、草刈したゝめ打休みて居たるをみるに、かばかりの旅のそうげきもなく、おのがまゝなるさま、息のぶる心地して覺侍る。

野邊にふし己が儘なる草刈の假の世なれば哀れとぞ思ふかくて浦輪の里にて、晝かれいひなど物して鴻巢にゆく。

二十三日。鴻巢の森の内、鳩のなくを聞て。

打くもり木深き森の下みちに雨よぶ鳩のこゑぞわびしき熊谷の堤を過る時、此あたりよりも晴たる空には、富士の根のみえけれども、きのふけふも山は皆くもりて見えず。富士の根もかさなる雲に隔りてひなのなが路の慰ぞなき

熊谷の驛に熊谷寺といへる寺あり。是は直實の舊跡にて、今に幕など什物となりて残り。彼むかしを思ひ出て。

ものゝふの道を盡して後の世をねがひし人の跡ぞ悲しき二十四日。神名川を渡る。此川は武藏と上野との境なり。折から在明の月も残りければ、古ことなど思ひ出て。

馴れ／＼し月にぞ慕ふ同じ名もけふに盡しぬ武藏野の原二十五日。松井田の山陰にて、日ぐらしのなくをきゝ侍りて。

旅人の過行く山の下かけにうきねなそへそ夏の日ぐらし又淺間の麓にて。

朝まだき淺間の山の根おろしに夏野わけ行心地こそせね二十六日。矢代の宿近邊の路に、流れ有て並木の柳あり。

彼西行法師の詠思ひ出でられて。

道の邊の清水にうつる柳かけ昔のあとをしたひてぞゆく二十七日。筑摩川の渡をしてまかりけるに、在明の月のほの／＼と出侍るを見て。

夜を深みなほたどるべき夏草を月にわけゆく更科のさとかさむらのほたるを見て。

淺茅原すだく螢をしらつゆにうつろふ月の影かとぞ見し里人に尋ね侍りしに、姨捨山は南にあたりぬ。東の山は西條山などゝをしへ侍し也。

善光寺御旅館に、河中嶋合戦以後、上杉謙信へ近衛前久公

よりの御返状を、掛軸にて有之候處、金澤へ爲御持被成、御吟味の上、正筆に候はゞ可被召置候。不然は可被反下旨御意に付、御用人不破平左衛門へ申聞、御宿主奉之。則爲御持罷越。

二十八日。大雨。關山にて思ひつく。
五月雨を暫しとゞめよ關の山わけゆく袖をほす方ぞなき二十九日。晚來_ニ於海邊_一

越の海夕日うつろふ浪間より佐渡のしま山雲かゝる見ゆ六月朔。境の旅宿にて。
君が知る境のうらのかり枕旅ねもやすくゆめむすばまし

二日。布施の海の事此あたりにやと、里人にたづね候處、此あたりを布施保内と申候。さだかならず候得共、此あたりを布施の海と申敷のよしいらへし也。但ふるくよめるは湖也。

布施の海戸渡る船もかへる浪のまぢかく成ぬ故郷のそら三日市を出て布施のあたりにて。

越の海沖に三崎のやま見えて布施の河原に雲雀なくなり此あたりよりみるに、海のみかひは能州の山つゞきなり。其内にて高きをとへば、石動山とこたへし也。

澤水にすだくほたるのなかりせば月を霜夜の光とや見ん四日。於岩瀬いはせ野とはいづこをかいふと、里人に尋ね侍りしに、むかしはさる野の候て、石ばしの松原など申つるが、今は海中になりし也。所は此驛の少し下の方なりと申侍りし也。

岩瀬野や小萩が原もわだづみのそことしるしも浪の下艸今夕刻着高岡。因て瑞龍寺參詣の志兼て有之に付、獨企參拜の處、於寺中行逢生駒直政幸に同道、前君の墓所並佛殿等へ詣でぬ。釋迦堂・禪堂・外廊・山門等慰覽しぬ。山門の額は高岡山の三字隱元筆跡也。寺中物ふり殊勝也。

いや高き岡のおほてら來て見れば瓦の松の陰もふりけり行末をおもふも久しいや高き岡の大てらいく代經ぬべき五日。埴生にて八幡宮へ參詣、青銅三十疋獻之。神主石見守